

3 What's new! 初めての Anti-Cancer (20150709 (Thu))

今日, 07/09 Thu で, この病院 NCGM に入院してちょうど 3 週間が経ったことになる. 国立癌センターでも原発部位が特定できず, 最後に紹介されたのがここだった. お陰で, 頼りになるお医者様と医療スタッフに囲まれて, 現在は治療に専念できる.....と言うと聞こえはいいが, 実体は自分の強欲さ故, 「あれやりたい!」, 「これもやらにゃ!!」で, あまり褒められた闘病生活ではない...と言うより, 最悪の不良患者である.

先生がた, ゴメンナサイ.

3.1 話は唐突に... 予備校における下流志向

今日, いくつかの小さな検査の結果, 問題がないようであれば最初の抗がん剤 (Anti-Cancer, これ以降 AnCc で略記する) の投与を行なうことになっている.

説明を受けたとき, 副作用について話を聞いた. 「いやなことがすべて起こります。」と言われた. 脱毛, 吐き気, 眩暈, 脱力, 黄疸の症状などらしい. 仕方がない. そこまで引き受けての闘病なのだ! と, 頭で解ってはいても, やはり怖い.

決して自分が Dandy であるとは思わないし, ただでさえ貧相な体が最近では痩せて見る陰もないような体型になっていることは解ってはいるが, モノゴコロ付いて以降, 自分を動かして来たのはある種の Heroism であり Dandyism であり, そして Elite Consciousness であった.

それが崩れることへの恐怖なのかも知れない.

Elite Consciousness で代表させよう. これは何か. あくまでも私見であるが, 所属する研究室では特権的に勉強すること, 研究すること, 職場では特権的に仕事をする, である. 数ヶ月前まで筆者のいた (現在もいることになっている) 職場は, 予備校であった. 中途半端な年齢 (30s - 40s) の「人気講師」ほど, 血を流して仕事することをしない. Text に対するケチツケはするが, 生産的な批判はできない. まして, 自分で構想を立て, 執筆し, 編集を行ない, \TeX で入力し, 校正作業を行なう, という, 何かを創造するための当然の作業——ドロカブリ——をしようとしなない. 従って, 教室あるいは統括のスタッフにも信用されずに終る. そんなヤツばかりである.

他方では, スタッフの方も, 評価基準がせいぜい生徒アンケートくらいしかないせいで, 両者ともナァナァの惰性的関係から一步も飛躍できない. その結果, 口当りのよい, 周りに女子高校生の集まる, 生徒とナカヨシの人気講師が重用され, 数学的なナカミはますます薄くなっていく. 講師室では, グルメ談義と飲み会の話以外は口にしてはいけないことになっているらしい. これが (一応は大手の, 名の知れた) 予備校の実体である.

ここに, 私の考える Elite Consciousness の対極にある「下流志向の予備校講師 version」である. 2 コト目には権利と privacy を持ち出す. ダニが権利など持ち出すンジャーネーヨ! 蚤に privacy なんかネーダヨ!

そして当然の帰結として, 井戸端会議のオバチャン的な物知りばかりになる. 誰も聞いていないのに, あるいは, 自分が声高にしようとする話に興味がない人間が周りにいることに気が回らず

に、デカイ声でドーデモイーような話を延々と続ける

朗らかそうにしていながら、あるいは職場のスタッフに従順そうな振りをしながら、講師室に入って来たとき、目を見て挨拶しない、できない。それでいて、幹部候補の今後偉くなっていくスタッフにはやたらとベタベタしようとする。まあ、来年のコマのこと考えてるのは解るけど、あの予備校で偉くなっていくスタッフは、全部私と仲良くなった人だから、君に出番はないよ、.....(実はここからは、きれいな中途半端下流志向ボケナスどもの個人批判を名指しで書きまくって、この document をボツにしようか、とも思ったのだが、止めておく。読んで欲しいのは、彼らと対極にある GrpE members や Reading Math members なのだ、ということ思い出した。)

何しろ良識の欠如、育ちの悪さが余りに露骨に見える。お願いだから死んで欲しい.....そうか、こっちが先か...この手の、貧相な知性、育ちの悪さ、「種も畑も悪かった、おまけに日照りでネヂレテのびた」ような中途半端教員の対極にあるのが、(繰り返しになるが)私の考える Elite Consciousness である。

コイツラ、一宿一飯の恩義も感じず、義理にも人情にも欠けたボーフラ守銭奴教員やスタッフとの差異性をなくしたら、自分の Dandyism, 最後の砦としての Heroism が瓦解する。その危機意識が先に立つ。自分は自分の決めた Dandy, Elite, Hero の圏域に留まることができるのか? それとも老齢と Cancer という2つの圧力の前に identity を守ることが出来ぬまま沈没するのか?

そして、今回は AnCc であることによるもう1つの bias がかかる。それは、Cancer という、私にとって passive な形で引き起こされた危機だけでなく、生じる結果の半分は active に選んだ療法の帰結である、ということである。Heidegger の言う被投性 (Gewolfenheit) と企投性 (Entwurf) の間の不安 (Angust) という関係だろうか。

病が pathos である (だから病理学は pathology だ。ちなみに19世紀の関数病理学は pathology of functions である。) だけならば、すべては諦めれば済む。そうではないのだ。怖さは、AnCc にある。AnCc による延命作業は、pathos (受動, 受難) であるだけでなく、自由意志による意思決定がその大きな部分を占める。自由がこれ程にも怖いものであるとは、これまで全く意識せずに来た。

3.2 そしてこの夏。@2015/07/10 Fri.

日が変わった。昨日 07/09 に、初めての AnCc の投与を行なった。その後の経過は今のところ順調であり、これと言った副作用はないし、体がダルイということもない。とは言え、副作用が発現するのもも個体差があり、いつ現実のものになるか、は解らないのだが、それでも多少は心が落ち着いていることは事実である。早ければ今日からいろいろな trouble があるそうなので、食欲も (あるとは言えないにせよ、むしろ数日前よりもましな程度だが) 普通であることで、多少とも心が安まる。

現在、職場で信用できる人間は、自分にとって4人、initial で T.,S. / O.,S. / Y., T. / K.,K.

である。

自分としては、この闘病日記の第1日目に書いた通り、夏の講習が始まると同時に、現受験生の講義から復帰する積りであった。ところが、先に挙げた4人の方々の総意として、反対された。「オマエは玉砕すべきではないのだ!」と。復帰する以上は、現受験生の入試当日まで責任をとるべきであり、2度と、途中で講義に穴を空けてはならないのだ、と。更に、今年度ですべてが終るわけでもない。来年度にも繋がるような形で関わるべきなのだ。

猛烈に、声を荒げて抵抗した。最も悲観的な見方をすれば、AnCc を用いても半年なのだ。来年度のことなど、考えてられる状態ではないのだ。1学期後半と夏から2学期にかけての内容は、オレしかできないのだ。たった40題弱の問題から、夏に100題分の話をするために、オレは教壇に立つのだ。悪いが来年度以降の受験生については、オレは責任をもつことは不可能なのだ。

.....

確かに不安がなかったと言えば嘘になる。初めてのAnCcの治療を受けたばかりで、この夏、いきなり長くて4hoursの講義を5日間最後まで勤めあげることができるのか? しかし、それでもやるべきだと思った。スタッフが教員に仕事をもって来る以上、「死んでもやり通せ!」というのが、依頼のあるべき姿だと思ったからである。向こうの立場として、「何故、『最後の仕事として、この夏やり切れ』と言わないのか?! 死んでも教壇に立て!!」と言うのが、オマエラの立場ではないのか?!まったく聞き入れては貰えなかった。提示された計画は、8月中旬からの確率の講座(2hours times 5)と下旬の図形の講座(3hours times 5)、そしてRegularの1学期後半と夏、そして2学期につながる特別講座を8月末から9月の初頭に新設して、やるべきであったことをまとめる、というものだった。

これを、彼女と彼ら4人が苦渋の結果に見出したbestな選択であるものとして、今日の朝、認めることにした。多くの後悔は残ると思うが、また内心、ホッとしたところもある。週に1度は、AnCcの投与のため病院に拘束される身である。通院すれば済むというものではない。ここがAnCcにおけるpathosだけではない、こちらからのactivityが要求される場面でもある。Cancerであることが判明し、AnCcの投与が決まった途端に、治療に関わってくれるお医者さまや看護スタッフが、必ず「ガンバリマシヨウ!」と言ってくれる。「ガンバツテクダサイ」ではないのだ。初めは「優しいナ...」と思っていたのだが、違った。患者、被投与者、はCancerを「治して貰う」ことはできないのだ。医者も看護に関わってくれる方々も、「治してやる」ことはできない。

共同作業、と言ったら軽すぎるかもしれない。しかし、主体と客体という二元的存在の間の単一な方向性をもつ関係構造でないことは明らかであるように思う。治療を施す側(主体)と治療を受ける側(客体)への分化を許さない何かがある。Pathosへの関りの、主客二元論を許さない、あるいは主客対立を越えざるを得ない関係性、いずれも主体であらざるを得ぬ、Pathosへの『間主体的関係』としか言い様のない構造の中で生きていく、ということなのではないか。

これは、F. Nietzscheの言う強者のNihilism、無への「絶望的飛躍」に他ならぬ。すべてが終ったとき、「これが人の生であったか。それならばもう一度!」

以上、Working Mathematician ヅラをしてはいるものの、所詮実体は不良の哲学青年のナレノ

ハテが、Cancer になって多少はマジメに考えたことである。細部は詰める必要があるとは思いますが、大まかなところはそうは間違っていないのではないかと自負している。

そう、確かに間違いはない。しかし、決定的かつ絶望的な欠陥がある。Nietzsche の超人にも、Heidegger の Dasein にも、似ることさえ不可能な、ressentiment だらけの人間が考えたことではない、という点である。

3.3 Elite Consciousness

多少は、筆者の考える Dandyism, Heroism, Elite Consciousness について、その中身を補充して置きたいと思う。私筆者は、次の意味で Elite である。

もちろん、自分が Hero であったり Dandy であったり Elite であるとは (official には人には) 言わない。何故か? 世間で言われるコツブ Elite と比べられても困るのである。

ここから、語り口を多少変えさせて下さい。さすがにテレクサイのです.....

17 歳でモロトフカクテル (火炎瓶) を投げて、鑑別所に入って、成人扱いで起訴され、何時の間にか高校 (東京都立九段高校) は退学処分になっていて、トロツキストとして職業革命家への道をひた走る、というのを Elite って言うわけ。たとえば、全国高校生全共闘議長とか、ネ。

所属していた新左翼の過激派組織でも、大学生を押し退けて、年齢的には高校生で大幹部になったけど、組織の方針を巡る内部論争で敗北して挫折し、検定で大学入学資格を取って、48 流の私大の文学部哲学科 (これが日大文理のこと) に 2 次補欠とかでスベリコンで、ところが 1 年生の後期には特待生になって、それ以降卒業まで学費は払ったことがない、とかになると、これはもう超 Elite なの。

だって、大学の教員の語学力、古典ギリシア専門 (これは私の専門でもあったわけだけど) の教授よりも、私が 2 年生になったときには明らかに私の方がギリシア語もラテン語もできたし、英米哲学専門の教授の英語って、「よくこれで洋書読めるな?」っていう Level で、案の定、本読んでなかったし。どっちの大先生も、蔵書量、当時の私より少なかったな (マジメな話、三流大学にはこういう大先生がいるから、なるべく、というか絶対、チャンとした大学行かないとイケマセン。私のような Elite だからできるお説教)。

だから、修士課程で日大の外に出ることが決ったとき (東京都立大学人文科学研究科修士課程というところに入学した。50 人くらい受験者がいたけど、合格者は 4 人だった。他に京都大学の院にも受かったけど、好きな女性が東京にいたから、って言うか、世界を焼き尽くす程の大恋愛の真っ只中。もちろん止めた)、こういう大先生や、そういう先生についている上級の院生からは、心からの祝福を受けた。毎日毎日が、私にオビヤカサレル日常であつたらしい。確かに、演習でイジメまくったし、ボロクソに批判したし、先輩の奨学金も私がトツチャタこともあるし。大先生が seminar の直前に私のところにコソソリやってきて、「ここは文法的にはどう読むのか、教えてくれ。」とか言って、「先生、カンニングはいけませんよ」って追い返したりした。こういうのが、ホントの super-hyper-meta Elite なわけ。

この後、数学でも Elite 生活を送ることになるけど、今日はもう疲れたから、この辺で。

To Be Continued.